

大店の会議と髪飾り

香月美夜

大店の会議と髪飾り

商業ギルドの三階にある会議室では大店の店主ばかりが集まる会議が行われていた。ギルベルタ商会の店主である俺も当然参加している。すでに冬支度が始まっている非常に忙しい季節なのだが、それでもこうして会議が行われるのは収穫祭の結果という大事な議題が話し合われるからだ。

「では、今年の収穫祭の結果について教えてもらおうか」

いくつかの議題について話し合った後、ギルド長がオトマール商会の店主に視線を向けた。ガタリと立ち上がった今の店主は、ギルド長の息子でフリーダの父親だ。

オトマール商会はこの街がエーレンフェストと呼ばれるようになるより昔から食料品を扱っている老舗だ。城への出入りが許されているため、領地内の収穫に関する情報が最も入りやすい。

「どうやら今年の収穫も芳しくないらしい。貴族が管理している土地は例年通りだが、直轄地は年々収穫量が落ちていっているそうだ」

「今年も、か。一体いつになったら回復するんだ？」

オトマール商会の言葉に、会議室の中には重い溜息が広がった。何となく予想はできていたが、それでも頭の痛い状況だ。収穫量の減少で食料品は高騰する。冬支度を行わなければならない時期に食料品が高騰すると、深い雪に覆われる冬の生活は蓄えが足りずに非常に厳しくなるだろう。この街の住人、その中でも貧民達にとっては死活問題だ。俺の頭には最近店に出入りするようになったマイン

とルツツの顔が浮かんだ。

……あいつらの家は大丈夫か？

「神殿から神官達がいなくなつて魔力が足りなくなつたからと聞いたが……」

「そういえば、数年前に神殿から戻つた者を貴族としてお披露目しなければならぬから、と支度して
いる家がいくつもあつたな。その影響が出ているんじゃないか？」

取引のある貴族から仕入れたそれぞれの情報を繋ぎ合わせた結果、遠く離れた中央で起こつた政変の
影響で神殿の神官達がいなくなり、農村へ魔力が届かなくなつたことが原因ではないか、と推測できた。

「原因追及はもういい。それより、収穫が芳しくないというのはどの程度なんだ？ 買い付けの値段に
も影響するから、今後の対策も変わってくる」

俺の発言に対して周囲から賛同の声が上がった。

「ベンノの言う通りだな。神官が戻つてこないなら、これ以上は話をしてても無駄だ。詳しい報告を頼む」
皆の声に、オトマール商会の店主は自分の手元にある木札へ視線を落とす。

「去年に比べると一割も落ちていないので、今年はまだそこまで深刻でもないようだ。以前にも述べた
が、西の領地は政変の煽りを受けて非常に厳しく、収穫量の減少率はエーレンフェストの比ではない

らしい。ここは中立を貫いたため、これでも変化が緩やかだそうだ」

大きな減少ではないという報告に店主達がほんの少しだけ安堵の息を吐く。それでも、会議室を見回
す限り、どの店主の表情も厳しい。緩やかでも年々厳しくなっているのだ。

「マルク、十年前と比べるとどの程度減少しているか、わかるか？」

「四割近く収穫量が減少している計算になります」

背後に控えるマルクに尋ねると、すぐに答えが返ってきた。もう十年近く増えていない。少しずつとはいえ、減り続けている。

食料品が高騰すると、商品を運ぶ旅商人の食費が高くなる分だけ買い取り値も上がる。冬支度に備えてできるだけ稼ごうとする旅商人との値段交渉も激しくなる。そして、困ったことにお貴族様からの無茶ぶりや値下げ交渉は多くなるのだ。貴族の店に出入りする大店にとっては損がかなり大きくなるので、値段交渉でどの程度勝てるかが大きな分かれ目だろう。

「ベンノのところには西の領地を回ってくる旅商人がよく出入りしていただろう？ あちらの様子はどうかと言っていた？」

オトマール商会に次ぐ老舗のヘリング商会の店主に問われて、俺は少し考え込んだ。商人にとって情報は命に直結する。相手から有益な情報を得るためには自分が持つ情報も出さなければならぬ。どの情報を出して、どの情報を隠すのか。得られた情報から何を読み取るのかは商人の腕の見せ所だ。

「以前に比べてエーレンフェストとの境界に近い町に人が増えているそうだ。その辺りの市民権や宿泊費の値段がぐっと上がったと聞いた。西の直轄地はかなり厳しいようだ。旅商人の商品が値上がりしてしたが、来年は更に高くなるかもしれない。南回りはどうだ？ ヘリング商会はそっちが多いだろう？」

「南の領地は特に変わらん。大幅に上がることも、下がることもないようだ」

……ん？ 南の領地は変わらんだと？

引っかけかりを覚えて俺が眉を寄せた途端、周囲で聞き耳を立てていた店主達が「南の領地は変わらない」という情報についてそれぞれの意見を述べ始めた。

「南は変わらないのか。そろそろ仕入れ先を代えることも考えた方が良さそうだな」

「待て、待て。そんなに簡単に代えるもんじやない。一度切つてしまうと、何かあった時にもう一度縁を繋ぐのは難しいぞ」

「だが、西の状況が厳しくなつて何年だ？　これ以上時期を待っていたら、南で新しい仕入れ先が見つからずに足下を見られることになる」

「それもそうだ。出遅れると利益がガクンと下がるのは目に見えているじやないか」

西の領地よりも南の領地で新しい仕入れ先を見つけたいという店主達の声聞きながら、俺は腕を組んだ。政変で負け組についた西の領地が厳しいのはわかるが、政変で流れに乗った南の領地は普通に考えれば収穫量が上がるはずだ。

……どの情報が間違つてゐるんだ？

「おい、ベンノ。ギルベルタ商会はどうする？　お前も西との取引が多いだろ？」

俺は答えを考えながらゆつくりと顎を撫でる。情勢に関する話は誰も彼も又聞きなので、正誤を判断するのは難しい。もう少し情報を集めて様子を見た方が良さそうだ。

「……ウチはもう少し今のままで行くつもりだ。まだ見切りをつけるには早いと思う。それに俺は西の取引先に今までの恩もあるからな」

父親が亡くなって俺が店を継いだばかりの頃、「成人して間もない若造と取引なんぞできるか」と手を引く取引先が多かった。その時に支えてくれたのは西の領地を回る旅商人や取引先だった。一番苦しかった時に支えてくれた者達を、今の時点で切り捨てる気はない。

……このまま減少を続けるとしたら、いずれは切る時が来るだろうが……。

恩は大事だが、ギルベルタ商会を潰すつもりはない。時期を見誤ることだけはしないように気を引き

締め、俺は周囲の声に耳を澄ました。

ある程度の情報のやり取りが終わると、会議室が少し静かになる。その頃合いを見計らってギルド長が立ち上がり、パンパンと軽く手を打った。

「今年の収穫量についての話はもういいか？ 城から更に詳しい情報が入った時は、いつも通り受付前の書棚に資料を置く」

これで今日の会議は終了だ。店主達がそれを察して立ち上がり始める。会議の緊張が緩んでがやがやとし始めたところでギルド長が俺を見てニヤリと笑った。

……何をする気だ、あのじじい!?

嫌な予感に自分の口元がひくつと引きつるのがわかった。思わず後ろを振り返ると、マルクが少し苦い顔になって指先でトントンと自分の頭を突いている。

……髪飾りか!?

察した時にはもう遅い。ギルド長は会議室にいる大店の店主達に見せつけるようにフリーダの髪飾りを掲げた。

「協力してくれた皆に首尾を報告しておこう。夏から探していた髪飾り職人が見つかり、こうして素晴らしい髪飾りを孫娘の洗礼式のために手にすることができた。情報収集に協力してくれた皆に礼を。……そして、髪飾り職人を探し出し、こうして依頼を受けてくれたギルベルタ商会に感謝する」

夏の洗礼式で見かけた物より更に豪華な髪飾りを持って得意そうに笑うギルド長の言葉で、店主達は収穫量の話が出た時よりも騒ぎ始めた。

「あの洗礼式の髪飾りよりずっと豪華じゃないか!」

「職人を見つけたのはギルベルタ商会だって!」

店主達が騒ぐのも無理はないだろう。夏の洗礼式でマインの姉の髪飾りに注目していた者はギルド長だけではない。俺もそうだったが、大店の店主達は金になる商品だと判断していた。洗礼式の直後からギルド長が情報を掻き集め始めたとなれば尚更だ。

だが、大店の店主達がどれだけ必死になっても髪飾りの情報は集まらなかった。髪飾りをつけた子供を知っている者がいなかったのだ。洗礼式の時に後ろの方に並んでいたのも、南の子供ではないかと推測できたが、北側に店を持つ店主達は南側の貧民街には知り合いが少ない。

自分達が足を運ぶ範囲の工房の職人達や飲食店街の知人にも尋ねてみたが、彼らは家族の洗礼式でもなければ近くの集合場所でお祝いの言葉をかけて送り出すだけだ。行列について行くこともないので、近所の子供の様子しかわからない。商機を探して目を光らせている北側の商人達と違って、中央から南へ少し下ると髪飾りを目撃した者自体が非常に少なかったため、全く情報が集まらなかった。

「おい、ベンノ。一体どうやって職人を見つけたんだ!」

俺は腕を組んで考え込んだ。俺が自分の手で何とか探し出した情報ではない。色々やり取りをする中で、マインが「これも商品になりますか?」とちよつとした思いつきで髪飾りを俺に見せたから髪飾り職人が発覚したのだ。

……マインと会ったのも、たまたま、なんだよな。

コリンナに招かれて食事を共にした時に、たまたまオットーがマインという変わった子供を話題に上げた。それから少し経って、旅商人に憧れるマインの友人を諦めさせるのに一役買っってほしいとオツ

トーに頼まれた。普段ならば面倒だと断るところだったが、たまたま仕事の手が空いていたので変わつた子供を見てみたくなつた。今考えると、よく会いに行く気になつたものだ。

「……奇跡的な偶然が重なつた結果だな。商売の神様のお導きじゃねえか？」

「くっ、情報源はそう簡単には教えられんか……」

思ったままを俺は言つたのだが、店主達には「それを明かす商人がいると思うか？」という意味に聞こえたようだ。情報を欲していた店主達は悔しそうな顔で引き下がっていった。だが、逆に目をギラギラと輝かせて近付いてくる店主もいる。

「ベンノ、至急髪飾りを売ってほしい。ギルド長に売つたようなやつだ」

オトマール商会に張り合っているヘリング商会の店主が商談の体勢になっている。

「至急と言われても冬支度の季節だから職人が忙しすぎる。冬の手仕事なら何とかなるだろうが……」

「それじゃ駄目だ。ウチもこの冬の洗礼式に欲しいんだ」

妹の末娘が洗礼式だというヘリング商会に同調するように、大店の店主達が自分の親族の洗礼式や成人式について主張し始めた。ヘリング商会が新しく髪飾りを手にするならば後れを取るわけにはいかならしい。

「ちよつと待て。ギルド長に売つた髪飾りは特注品だ。今から注文を受けても冬の洗礼式には間に合わん。それに髪飾りを欲しいと考えているのは一人じゃない」

目をギラギラとさせている店主は何人もいるのだ。ここで誰かの注文を受けて、他の者の注文を蹴るのちのちめんどろと後々面倒なことになる。どう対応するか、と俺が必死に頭を動かしていると、「ほうほう」と面白がるようなギルド長の声が聞こえてきた。

「どうやら皆が欲しがっているようだが、髪飾りの準備はできるのか？ 髪飾り職人は冬支度があるか

ら我が家に遊びに来るのも難しいと言っていたようだが……」

その言葉で、本来はギルド長とオトマール商会が大店の店主達から受けるはずの羨望や不満がギルベルタ商会へ向けられ始めた。

……このくそじじい！ 髪飾りを入手できない不満を全てギルベルタ商会に押しつける気か！

「旦那様、ギルベルタ商会にとってはかなり重要な取引になりますね」

背後から聞こえたマルクの言葉に怒りがスツと解けていく。父親が亡くなってから必死に立て直してきたギルベルタ商会の完全復活を見せつける良い機会だ。これを逃す手はない。

……冬の洗礼式に欲しがっている店主は何人だ？ マインはどのくらいで完成すると言っていた？

冬の洗礼式までどのくらい余裕がある？

しよつちゆう寝込むマインを捕まえることが一番難しいだろうが、マルクはマインの家を知っている。冬支度で物入りの時期だからこそ、少し多めに料金を支払えば引き受けてもらえるかもしれない。

「そうだな……。デザインから注文を受けるのは無理だが、夏の洗礼式と同じ物ならばいくつかは準備できるだろう」

「おお。それで構わないから売ってくれ」

「だが、冬の洗礼式までに日数がない上に、冬支度で忙しい時期だ。特別料金になるし、どれだけの数ができるかわからない。先着順になるぞ」

俺が店主達を見回しながらパタパタと手を振ると、マルクがすつと木札を出した。店主達がお互いに睨み合いながら名前を書き込んでいく。

「盛況せいきやうなのは儂わしの宣伝せんでんのおかげだな」

勝ち誇ほこった笑えみを浮うかべて恩着せがましいことを言いうギルド長ちやうを見据みすえ、俺おれはポケットの中なかにある紙かみに触ふれた。俺おれが握にぎっているのは髪飾かみかざりだけではない。市場しじやうをひっくり返かえすだろうと予測よそくできる植物紙しよくぶっしが後あとに控ひかえている。俺おれはフンと鼻はなを鳴ならした。

……今いまに見みている、くそじじい。いつまでも大おおきな顔かおができると思おもうなよ。

おわり